



Title	家族の貧困はいかに乳幼児の普通の遊びに現れるのか？：第2回北海道・札幌市子どもの生活実態調査における2歳・5歳保護者票の分析
Author(s)	及川, 智博
Citation	子ども発達臨床研究, 19, 119-132
Issue Date	2024-03-25
DOI	10.14943/rcccd.19.119
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/91883
Type	bulletin (article)
File Information	023-1882-1707-19.pdf



[Instructions for use](#)

家族の貧困はいかに乳幼児の普段の遊びに現れるのか？

— 第2回北海道・札幌市子どもの生活実態調査における2歳・5歳保護者票の分析 —

及川智博

How does family poverty appear in children's everyday play?

— An analysis of questionnaires for parents with children ages 2 and 5 in the second survey of children's living conditions in Sapporo & Hokkaido —

Tomohiro OIKAWA

問題と目的

子どもの貧困にかかわる議論は、子どもたちが具体的に経験している事象からはじめられる必要がある。家族の貧困を背景として、日常生活のなかで当たり前前に享受されるべき物事を経験することができなかつたり、また他の子どもと比べて困難な状況に陥ったりするといった、不利をめぐる具体的な経験とその偏りは、具に捉えられ、そして改善していくための社会的基盤が整備されていく必要がある。そうした試みにおいて、議論の枠から溢れ落ちやすいのが、乳幼児期における子どもたちのウェルビーイングを規定している、普段の遊びである。

子どもの日常における遊びと、家族の貧困との関係性を扱うことの難しさは、いくつかの理論的な困難さによる。その主たる要点を、ここでは2点ほど指摘したい。第1に、子どもの遊びを規定する要因の多様性・複数性に関する問題である。松本(2022)が「海水浴」を例に挙げながら論じているように、たとえば子どもの住んでいる地域が海に近く、また温暖かつ水温も高い地域であれば、海水浴は日常的に経験する遊びとなる。その

反対であれば、海水浴を日常的に経験することはあまり無いであろうが、それは家族の経済的な苦しさによるものとは言い難い。昆虫採集や草花を用いた遊びのしやすさも、その子どもが暮らしているのが都心部か郊外か等によって異なる。その土地に根付いた文化に応じて、地域毎に遊びのレパートリーも変わってくることだろう。子どもの遊びは、家族の経済的格差以外にも数多ある要因が絡み合って生じている。しかし、その点を踏まえて、家族の経済的な苦しさとの強固なつながりが想定されるもの(例: レジャーや習い事)のみを取り出し、それを剥奪指標として検討したとしても、日常における子どもの遊びの全体像が見えてくることはない。

第2に、特に貧困の再生産とかかわっての、科学的因果性にもとづく議論の難しさである。科学的因果性とは、〈原因—結果〉の因果関係の法則を用いて現象を説明しようとする科学のとらえであり、その前提にはヒュームが論じた、〈原因〉と〈結果〉が時間的・空間的に近接していること(時空的隣接性)、〈原因〉は〈結果〉に先行すること(時間的先行性)、ある〈原因〉に類似した事象の先には同じく類似の〈結果〉がもたらされ

ること(恒常的连接)という、3つの条件がある(野家、2008)。では、上記3つの条件を備え、貧困の再生産という(結果)を導きうると推察される子どもの遊びというのは、果たしてどの程度あるのだろうか。たとえば、昆虫採集や草花を用いた遊びは、乳幼児期の子どもたちの日々を彩っている。しかし、その昆虫採集や草花を用いた遊び経験の有無や程度が、その子どもの将来における最終学歴や収入(そして貧困の世代的再生産)を左右する(予測する)と考えるのは、現実的に、少々無理があるだろう。

以上の理論的難題とかかわって、乳幼児の暮らしと家族の貧困との関係性を捉えようとしてきた先行研究の多くは、子どもの日常のかつ具体的な遊びの経験を取り上げるか否かについて、大きく3つの選択をしてきた。第1に、貧困にかかわる国際比較等のマクロな議論において、子どもの具体的な遊びの経験を取り上げないという選択である。たとえば、米国・英国・フランス・ドイツ・オランダ・日本における、親の学歴と関連した3～4歳児における資源の不平等について検討したWaldfoegel et al. (2023)は、日本は他国と比べて、学歴による家族間の所得格差が比較的小さいほか、保育にかかわる資源が比較的均等に分配されている珍しい国であると指摘している。そうしたマクロな調査や議論を進めようとする際、子どもたちの日常的经验を変数として組み込むことは難しく、親が子どもと一緒にいる活動(読書や外出など)や、家族の日課(食事、就寝時間、テレビなど)等を測定することができなかったこと、またその分析を進めることで、早期における子どもの経験の全体像を把握することが課題であると、Waldfoegel et al. (2023)は述べている。

第2に、「いま、ここ」における家族の貧困によって経験が特に左右されると推察される遊びとその不平等に注目するという選択である。たとえば小西(2016)は、長崎市内の保育所を利用する保護者を対象とした養育環境の経済的不平等に関する調査を実施している。具体的には、①生活・経験の不平等(例:家で果物をほとんど食べない、パ

ソコンを持っている、子どもは習い事をしている、旅行・レジャーの資金が不足している)、②医療の不平等、③子どもとの関わり方(養育スタイル)、④経済的な困難さの現れが、所得階層の異なる家族間(低所得層 300万円未満、中所得層 300万円以上 500万円未満、高所得層 500万円以上)でいかに異なるかを検討している。結果、子どもの持ち物や住居、予防接種の有無、子どもへのイライラや保育料の負担感などについて、所得階層間で差異が見られることが明らかにされている。たしかに、パソコンを持っていたりレジャーに行ったりすることの不平等は問題として浮かび上がるが、川田(2019)が指摘するとおり、そうしたモノを所持していたり特別な経験をしたりすることと、子どもたちの普段の遊びとを同列に扱うことはできないだろう。

第3に、子どもの将来における、貧困の再生産とつながりが深いと考えられる遊びとその不平等に注目する選択である。この選択には、子どもの遊びを「投資」として捉える議論の枠組みが特に強く現れている。たとえば、幼児の生活経験と家族の経済的格差との関係性およびその経時変化を、米国教育統計センターの1998年と2010年のデータを用いて分析・検討したBassok et al. (2016)は、特に子どもの遊びにかかわる項目として以下の2項目を取り上げている。すなわち、家庭での読み書き活動(例:絵本の読み聞かせの頻度など)と、家庭での学習活動(例:子どもと一緒に歌を歌うこと、図工を手伝うこと、子どもと一緒に自然について話すことなど)である。分析の結果、米国では幼児期の遊びをめぐる保護者の投資格差は縮小しつつあるものの、依然としてそこには大きな格差があることなどが示唆されたという。しかし、子どもの遊びを「読み書き」や「学習」といった効用論へと還元することは、これまで遊び研究において厳しく批判されてきた(たとえば、加用、2013)。また、そもそも乳幼児期の子どもたちが普段「学ぶために遊んでいる」と考えているとも想像しがたい点において、この第3の選択は、「いま、ここ」における子ども期

とその経験の保障という観点から距離を置きかねない選択であり、注意を要するものである。

ここまでの方法論的な困難を受けて、改めて確認すべきは、貧困について調査する側が、子どもたちの普段の遊びに、指標としての過度な意味づけを付与しすぎないことであろう。特に先述の第2および第3の選択と問題にかかわって、子どもたちの日々の遊びは、家族の貧困によって明らかに左右されるものばかりでもなければ、将来の収入や進学等のために子どもたちが展開しているわけでもない。ある日の午後、何気なく砂場で遊ぶことを「投資」の観点から捉えることは、さすがに大仰であろう。貧困をめぐる問題と直接結びつけるべく子どもの遊びを取り上げようとすると、子どもたちの何気ない暮らしのリアリティはこぼれ落ちてしまう。

むしろ、乳幼児期における子どもの貧困をとらえる調査者の側に期待されるのは、子どもたちの遊びを、子育て家族と貧困との関係性を把握するための、1つの「窓」としてとらえることであろう。この観点による検討を先駆けて実施している先行研究として、川田(2022)がある。川田(2022)は、2016年から2017年にかけて北海道および札幌市で実施された「第1回北海道・札幌市子どもの生活実態調査」(以下、第1回調査)における、2歳および5歳の子どもの保護者に対する調査票の結果を分析している。その結果、家族の所得階層や保護者の属性等を反映して、遊びの種類・場所・相手に一定の偏りがみられることを明らかにしている。特に札幌市の2歳(1歳半ないし2歳半頃)の段階で、子どもが普段遊ぶ場所は世帯所得等によってゆるやかに区分されていることが示唆されるなど、子どもたちの遊びを、子育て家族の実態やその苦しさを映す鏡として扱うことの有効性が推察される。ただし、川田(2022)による分析は一時点によるものであり、そこで得られた子どもの遊びと家族間の経済的格差との関係性が、経時的に一貫したものか否かについては定かではない。特に、2020年以降に拡大した新型コロナウイルス感染症(以下、COVID-19)は、行

動制限や暮らしぶりの変化、また経済・雇用の情勢の変化をもたらした(厚生労働省、2021、2022)。この経過を受けて、家族間の経済的格差は、子どもたちが普段経験している遊びにいかにも現れているのだろうか。そして、その現れ方は地域や子どもの年齢、またCOVID-19感染拡大の前後によっていかに異なるのだろうか。

以上より本研究は、家族間における経済的な格差が、乳幼児期の子どもたちが経験する普段の遊びにいかにも現れているかを明らかにすることを目的とする。この目的を達成するために本研究では、COVID-19の感染拡大下である2022年に北海道内30の自治体で実施された「第2回北海道子どもの生活実態調査」と、同じく2021年に北海道の政令指定都市である札幌市で実施された「令和3年度子どもの生活実態調査」の、2歳児もしくは5歳児の子どもを有する保護者への調査票の回答を分析に使用する(以下、両調査を総称して「第2回北海道・札幌市子どもの生活実態調査」、必要に応じて省略して「第2回調査」と呼ぶ)。その上で、所得階層を主たる説明変数として位置づけつつ、川田(2022)による第1回調査の分析結果と対比しながら、乳幼児期の子どもたちが日常的に経験する遊びの実態に、家族の経済的格差がいかに現れているのか、その傾向を把握する。

方 法

先に述べたとおり、本研究では、当該特集号で扱われている、2021年10月～11月に札幌市で実施された「令和3年度子どもの生活実態調査」と、2022年5月～9月に札幌市を除く道内30自治体を対象として実施された「第2回北海道子どもの生活実態調査」における、2歳児もしくは5歳児の子どもを有する保護者を対象とした調査票を分析に用いる(以下、本研究では第2回調査における2歳児の保護者に対する調査票を「2歳票」、5歳児のそれを「5歳票」と呼ぶ)。両調査は実施された時期や地域こそ異なるものの、各調査票の項目は一致していることから、本研究では両調

査により得られた2歳票と5歳票を統一的に分析していく。

なお、第2回調査よりも前に、札幌市では2016年に、北海道では2016年～2017年にかけて、ほぼ類似した質問項目を用いた第1回調査が実施されている(以下、第1回調査と第2回調査を総称する際には「当該調査」という語を用いる)。第1回調査の詳細及び一連の当該調査が有する位置づけと理論的含意については当該特集号の松本・鳥山論文や松本(2022)を、また特に乳幼児(2歳・5歳)にかかわる調査票の設計とその理論的含意については当該特集号の川田・岩谷論文や川田(2022)を参照されたい。

以下では調査協力者と、本研究の分析で用いる第2回調査の質問項目の概要および第1回調査との関係性、そして分析手続きについて説明する。

調査協力者

5歳票については、北海道調査および札幌市調査ともに、幼児が通う保育所・幼稚園・認定こども園において調査票等を配布・回収した。2歳票については、北海道調査と札幌市調査では回収方法が異なる。北海道調査では、調査の対象となった自治体の1歳半健診時に調査票等(調査票・依頼文・回収用封筒)を配布し、郵送により回収した。札幌市調査では、住民基本台帳から2歳児を含む世帯を無作為抽出し、郵送で調査票等を配布した。回収については、郵送とWEB回答を併用した。また、配布に際して、北海道調査には北海道知事と本センター長、札幌市調査には札幌市長と本センター長の連名の依頼状を添付した。

以上の配布・回収方法の相違を反映して、特に

2歳票については、北海道と札幌では調査協力者である保護者の子どもの月齢が大きく異なるもとなった¹。まず、北海道調査の2歳票における幼児の月齢は平均21.1ヶ月(約1歳9ヶ月)であった。一方、札幌市調査の2歳票における幼児の月齢は平均31.5ヶ月(約2歳8ヶ月)であった。つまり、2歳票における北海道調査と札幌市調査の間には、子どもの年齢に換算して1歳近くの開きがある。具体的な子どもの姿でその違いを表現するとすれば、たとえば北海道調査の「2歳」は、多くの子どもで自立歩行(ひとり歩き)が安定し、二語文を話しはじめたり、ごっこ遊びの前段階であるつもり遊びや見立て遊び²がはじまったりする時期である。一方、札幌市調査における「2歳」は、走る動き(左足と右足で交互に地面を蹴り、かつ両足が地面から離れている瞬間を伴いながら移動する動作)が安定して室内外を軽快に走り回ったり、三輪車に乗ったり、三語文を話したり、つもり・見立て遊びが発展した、大人を巻き込んで展開するごっこ遊びが全盛期を迎えてくる時期である。ゆえに、同じ「2歳」といえども、札幌市調査と北海道調査それぞれにおいて保護者が想定し、そして調査結果として導かれている子どもの遊びの姿に大きな相違がある点については、事前に留意しておく必要がある³。この点を踏まえ、本研究では以下、2歳票で表れている子どもの年齢を「2歳」、それに合わせて5歳票の子どもの年齢を「5歳」と表記するほか、必要に応じて北海道と札幌市どちらの子どもを想定しているかを付記する。

なお、5歳票における幼児の月齢は、北海道調査では平均67.9ヶ月(約5歳8ヶ月)、札幌市調

¹ なお、本研究における子どもの平均月齢は、分析対象となった調査票の平均をそのまま示している。

² 「つもり遊び・見立て遊び」とは、たとえばブロックを電車に見立てて遊ぶように、モノ等を何か想像上の別のモノに見立ててあそぶ遊びのことを指す。一方の「ごっこ遊び」は、内容がより高次になり、たとえば“自分が駅員さんになりきった上でセリフを言いながら電車を動かす”等、見立てに加えて、場面や役割を取り決めて、それらを秩序立てながらあそぶ遊びのことを指す。

³ 北海道調査(平均21.1ヶ月)および札幌市調査(平均31.5ヶ月)で得られた子どもがみせる姿の具体的かつ詳細な違いについては、本特集号の川田・岩谷論文のほか、心理科学研究会(2019)や松本他(2015)、また乳幼児期の子どもの発達について詳述している各種書籍等を参照されたい。

査では平均 72.3ヶ月（約 6 歳 0 ヶ月）であり、顕著な開きはなかった。

調査内容および手続き

本研究では、第 2 回調査における以下の質問項目を分析に使用した。各質問項目の内容、分析に使用する際の方法、および第 1 回調査との相違点について確認した上で、本研究の分析手続きを述べる。

子どもの性別 「男」、「女」、「どちらともいえない」、「答えたくない」の 4 件法で回答を求めた。この項目は、後述する「遊びの種類」に関する分析においてのみ、第 1 回調査の回答を分析した川田（2022）との対比を明瞭にするために用いた。それに当たって、当該項目を含めた分析に際しては、「どちらともいえない」および「答えたくない」を除いた、男女いずれかの回答が含まれた調査票の回答のみを分析対象とした。

世帯類型 家族構成を選択肢で尋ねた上で、父母両方がいる世帯を「両親世帯」、父もしくは母のみの世帯を「ひとり親世帯」、どちらにも該当しない世帯を「その他世帯」に分類した。その上で、この項目は後述する「休日の遊び相手」に関する分析において、分析手法と回答者数との関係（「両親世帯」以外の回答が極端に少ないこと）から「両親世帯」による調査票のみを抽出して分析に使用した。

所得階層 家族の収入に関する回答（50 万円刻み、800 万円以上の場合には 100 万刻みの中から選択）を元に、所得階層を 5 つに分類した。具体的には、2019 年国民生活基礎調査において貧困率の推定に用いられる「相対所得貧困線」に対する収入が、倍率 1.0 倍未満の場合は「低所得層 I」、1.0～1.4 倍未満の場合は「低所得層 II」、1.4～1.8 倍未満の場合は「中間所得層 I」、1.8～2.5 倍未満の場合は「中間所得層 II」、2.5 倍以上の場合は「上位所得層」に分類した。その他算出に関する詳細については、当該特集号の松本・鳥山論文や、第 2 回調査に連なる第 1 回調査の概要を詳述している松本（2022）を参照されたい。なお、

本文中では結果の記述に際して、以下のように所得階層 5 類型の名称を省略している場合がある（低所得層 I = 低 I；低所得層 II = 低 II；中間所得層 I = 中 I；中間所得層 II = 中 II；上位所得層 = 上位）。

遊びの種類 「お子さんの遊びについておうかがいします。お子さんはどのような遊びをよくしていますか（幼稚園・保育園での遊びを含む）」という質問文をもとに、以下の 17 項目について、「よくする」、「ときどきする」、「まったくしない」のいずれかを選択する形式で回答を求めた（⑰のみ自由記述回答）。項目は、①お散歩（ぶらぶらと歩きまわるなど）、②公園の遊具で遊ぶ（すべり台など）、③砂場などでの砂や泥を使った遊び、④鬼ごっこやおいかげっこ、⑤なわとびやゴムとび、⑥虫や小さな生き物をとる、⑦草花、木の枝や棒、石などの自然物で遊ぶ、⑧ソリ遊び（冬季）、⑨水遊び（夏季）、⑩ゲームや動画の視聴、⑪つみ木やブロックやパズル、⑫人形遊びやままごと、⑬ミニカーなどおもちゃでの遊び、⑭折り紙や材料を使った製作遊び、⑮お絵かきやぬりえ、⑯絵本や図鑑を読む、⑰その他よくする遊びの、計 17 項目であった。分析には、⑰を除いた 16 項目を使用した。以上の項目について、「よくする」を 3 点、「ときどきする」を 2 点、「まったくしない」を 1 点として分析に使用した。

なお、第 2 回調査における遊びの種類 16 項目については、第 1 回調査から一部修正が行われている。その内容は、以下の 5 点である。第 1 に、「⑥虫や小さな生き物をとる」は、第 1 回調査の「虫とり」から情報を追加した項目である。第 2 に、「⑦草花、木の枝や棒、石などの自然物で遊ぶ」は、第 1 回調査の「草花、木の枝や棒、石ころなどで遊ぶ」から文言を修正した項目である。第 3 に、「⑩ゲームや動画の視聴」については、子どもの動画視聴等の実態を踏まえ、第 1 回調査の「テレビゲームや携帯ゲーム」から文言を修正した項目である。第 4 に、「⑭折り紙や材料を使った製作遊び」は、第 1 回調査の「折り紙や工作などの遊び」から文言を修正した項目である。第 5 に、「⑮

お絵かきやぬりえ」と「⑩絵本や図鑑を読む」は、家族の貧困と遊びの実態をより詳細に把握するために、第2回調査で新規に作成された項目である。

遊ぶ場所 子どもが遊ぶことが多い場所について、以下の9項目から、特にあてはまるものを3つ選択する多肢選択式での回答を求めた(⑨のみ自由記述形式)。項目は、①自宅、②友だちの家、③近所の路地や道路、④近所の空き地や公園、⑤幼稚園や保育園など、⑥ショッピングセンターや商店街、⑦子育てひろば(サロン)や子育て支援センター、⑧児童会館・公民館などの公共施設、⑨その他の、計9項目であった。分析には、⑨を除いた8項目を、それぞれ選択した場合には「あてはまる」、選択がない場合には「選択なし」として分析に使用した。

なお、第2回調査における遊びの種類項目については、第1回調査を踏まえて修正が行われている。その内容は、以下の4点である。第1に、「①自宅」は、第1回調査の「自宅(屋内)」と「自宅の庭やベランダ・バルコニー」を統合して作成された項目である。第2に、「⑤幼稚園や保育園など」は、第1回調査の「⑤幼稚園や保育園などの園庭」から文言を修正した項目である。第3に、「⑦子育てひろば(サロン)や子育て支援センター」は、第1回調査の「子育てひろばや子育てサロン」に、子育て支援センターを加える形で修正された項目である。第4に、「⑧児童会館・公民館などの公共施設」は、第2回調査で新規に作成された項目である。

休日に遊ぶ相手 「休日に、お子さんは保護者や家族の方とどれくらい一緒に遊びますか。」という質問文をもとに、以下の3項目について、「よく遊ぶ」、「ときどき遊ぶ」、「まったく遊ばない」、「あてはまらない」の、いずれかを選択する形式で回答を求めた。項目は、①お母さん、②お父さん、③その他の家族の、計3項目であった。分析の際には、「よく遊ぶ」「ときどき遊ぶ」「まったく遊ばない」の回答のみを使用し、「あてはまらない」は分析から除外した。以上の項目について、「よく遊ぶ」を3点、「ときどき遊ぶ」を2点、「まっ

たく遊ばない」を1点として分析に使用した。

分析手続き 以上の項目について、北海道の2歳票、同5歳票、札幌市の2歳票、同5歳票に調査票をわけて統計的な分析を行った。分析にはIBM社のSPSS Statistics (version 27.0)、およびフリーソフトウェアのjs-STARを用いた。

結 果

遊びの種類に関する分析

北海道の「2歳」および「5歳」、札幌市の「2歳」および「5歳」についてそれぞれ、所得階層5水準(低所得層Ⅰ、低所得層Ⅱ、中間所得層Ⅰ、中間所得層Ⅱ、上位所得層)と性別(男・女)を独立変数、遊びの種類に関する16の下位項目の得点を従属変数とした、二要因多変量分散分析(MANOVA)を行った。結果は以下のとおりである(Table 1)。

北海道の「2歳」では、性別の主効果が有意であった($F(16, 521) = 10.166, p < .001, \eta_p^2 = .238$)。所得階層の主効果($F(64, 2042) = 1.235, p = .102, \eta_p^2 = .037$)、および性別と所得階層の交互作用は有意ではなかった($F(64, 2042) = .855, p = .787, \eta_p^2 = .026$)。性別についてSidakの調整による多重比較を実施した結果、遊びの頻度が「男児>女児」となった遊びは、④鬼ごっこやおいかげっこ($p = .016$)、⑥虫や小さな生き物をとる($p = .021$)、⑬ミニカーなどおもちゃでの遊び($p < .001$)であった。

札幌市の「2歳」では、性別($F(16, 1173) = 26.196, p < .001, \eta_p^2 = .263$)、および所得階層の主効果が有意であった($F(64, 4594) = 1.572, p = .003, \eta_p^2 = .021$)。なお、交互作用は有意ではなかった($F(64, 4594) = 1.001, p = .475, \eta_p^2 = .013$)。性別についてSidakの調整による多重比較を実施した結果、遊びの頻度が「男児>女児」となった遊びは、⑥虫や小さな生き物をとる($p = .002$)、⑬ミニカーなどおもちゃでの遊びであった($p < .001$)。反対に「女児>男児」となった遊びは、⑪つみ木やブロックやパズル($p = .029$)、⑫人形遊びやまま

Table 1 地域・乳幼児の年齢毎における所得階層別の「遊びの種類」に対する回答の記述統計および多変量分散分析において主効果が有意であった項目の多重比較の結果

	所得階層					多重比較の結果 (性別(男女)・所得階層)
	低所得層Ⅰ	低所得層Ⅱ	中間所得層Ⅰ	中間所得層Ⅱ	上位所得層	
	M(SD)	M(SD)	M(SD)	M(SD)	M(SD)	
北海道・2歳(平均月齢21.1ヶ月)						
①お散歩(ぶらぶらと歩きまわるなど)	2.67(0.5)	2.74(0.46)	2.66(0.54)	2.77(0.45)	2.8(0.41)	
②公園の遊具で遊ぶ(すべり台など)	2.47(0.63)	2.47(0.62)	2.39(0.63)	2.52(0.64)	2.61(0.56)	
③砂場などでの砂や泥を使った遊び	2.17(0.81)	2.19(0.8)	1.95(0.72)	2.12(0.78)	2.11(0.79)	
④鬼ごっこやおいかけっこ	2.35(0.7)	2.45(0.61)	2.36(0.69)	2.28(0.76)	2.22(0.66)	男>女*
⑤なわとびやゴムとび	1.18(0.48)	1.29(0.58)	1.15(0.45)	1.16(0.41)	1.2(0.49)	
⑥虫や小さな生き物をとる	1.54(0.71)	1.6(0.76)	1.5(0.69)	1.55(0.71)	1.63(0.71)	男>女*
⑦草花、木の枝や棒、石などの自然物で遊ぶ	2.51(0.73)	2.45(0.65)	2.41(0.69)	2.57(0.6)	2.65(0.52)	
⑧ソリ遊び(冬季)	2.06(0.79)	2.18(0.78)	2(0.76)	2.17(0.75)	2.11(0.82)	
⑨水遊び(夏季)	2.31(0.64)	2.32(0.67)	2.18(0.68)	2.29(0.68)	2.31(0.67)	
⑩ゲームや動画の視聴	2.31(0.73)	2.48(0.63)	2.36(0.75)	2.39(0.68)	2.35(0.78)	
⑪つみ木やブロックやパズル	2.67(0.56)	2.72(0.47)	2.69(0.49)	2.8(0.43)	2.67(0.51)	
⑫人形遊びやままごと	2.42(0.69)	2.55(0.68)	2.53(0.63)	2.49(0.7)	2.57(0.63)	
⑬ミニカーなどおもちゃでの遊び	2.57(0.6)	2.67(0.54)	2.62(0.57)	2.61(0.62)	2.69(0.54)	男>女***
⑭折り紙や材料を使った製作遊び	2.04(0.7)	2.06(0.78)	1.88(0.74)	2.04(0.72)	2.02(0.74)	
⑮お絵かきやぬりえ	2.44(0.58)	2.5(0.61)	2.49(0.64)	2.56(0.6)	2.54(0.54)	
⑯絵本や図鑑を読む	2.51(0.61)	2.69(0.5)	2.71(0.5)	2.8(0.41)	2.81(0.39)	
札幌市・2歳(平均月齢31.5ヶ月)						
①お散歩(ぶらぶらと歩きまわるなど)	2.79(0.47)	2.65(0.52)	2.65(0.52)	2.66(0.5)	2.73(0.48)	
②公園の遊具で遊ぶ(すべり台など)	2.84(0.37)	2.72(0.49)	2.74(0.47)	2.72(0.46)	2.77(0.45)	
③砂場などでの砂や泥を使った遊び	2.51(0.63)	2.41(0.7)	2.44(0.66)	2.42(0.62)	2.39(0.66)	
④鬼ごっこやおいかけっこ	2.51(0.65)	2.59(0.59)	2.49(0.65)	2.47(0.6)	2.42(0.63)	
⑤なわとびやゴムとび	1.39(0.64)	1.38(0.65)	1.33(0.59)	1.34(0.59)	1.31(0.58)	
⑥虫や小さな生き物をとる	1.93(0.83)	1.87(0.78)	1.77(0.75)	1.87(0.74)	1.82(0.77)	男>女**
⑦草花、木の枝や棒、石などの自然物で遊ぶ	2.64(0.59)	2.63(0.55)	2.57(0.55)	2.62(0.54)	2.59(0.56)	
⑧ソリ遊び(冬季)	2.25(0.75)	2.33(0.72)	2.33(0.7)	2.28(0.64)	2.24(0.68)	
⑨水遊び(夏季)	2.66(0.51)	2.57(0.55)	2.57(0.56)	2.53(0.56)	2.51(0.54)	
⑩ゲームや動画の視聴	2.63(0.59)	2.54(0.63)	2.54(0.59)	2.49(0.64)	2.56(0.62)	
⑪つみ木やブロックやパズル	2.75(0.5)	2.74(0.47)	2.73(0.46)	2.72(0.45)	2.78(0.43)	女>男*
⑫人形遊びやままごと	2.77(0.49)	2.75(0.51)	2.7(0.54)	2.68(0.53)	2.61(0.6)	女>男***
⑬ミニカーなどおもちゃでの遊び	2.75(0.49)	2.72(0.55)	2.65(0.53)	2.65(0.57)	2.7(0.54)	男>女***
⑭折り紙や材料を使った製作遊び	2.23(0.7)	2.33(0.64)	2.25(0.67)	2.27(0.63)	2.3(0.63)	女>男***
⑮お絵かきやぬりえ	2.61(0.55)	2.62(0.56)	2.5(0.6)	2.54(0.52)	2.48(0.58)	女>男***
⑯絵本や図鑑を読む	2.73(0.45)	2.68(0.51)	2.71(0.49)	2.77(0.43)	2.8(0.43)	女>男*、上位>低Ⅱ*
北海道・5歳(平均月齢67.9ヶ月)						
①お散歩(ぶらぶらと歩きまわるなど)	2.53(0.54)	2.47(0.56)	2.45(0.6)	2.54(0.54)	2.48(0.55)	
②公園の遊具で遊ぶ(すべり台など)	2.69(0.5)	2.68(0.48)	2.69(0.47)	2.72(0.45)	2.68(0.47)	
③砂場などでの砂や泥を使った遊び	2.32(0.66)	2.35(0.64)	2.3(0.63)	2.38(0.64)	2.38(0.65)	
④鬼ごっこやおいかけっこ	2.71(0.48)	2.73(0.48)	2.67(0.49)	2.75(0.47)	2.69(0.49)	
⑤なわとびやゴムとび	2.13(0.74)	2.2(0.74)	2.16(0.7)	2.27(0.68)	2.17(0.69)	女>男***
⑥虫や小さな生き物をとる	2.08(0.81)	2.12(0.77)	2.07(0.72)	2.19(0.76)	2.08(0.73)	男>女***
⑦草花、木の枝や棒、石などの自然物で遊ぶ	2.51(0.59)	2.55(0.6)	2.53(0.57)	2.6(0.53)	2.54(0.59)	男>女**
⑧ソリ遊び(冬季)	2.6(0.53)	2.63(0.52)	2.61(0.53)	2.65(0.5)	2.67(0.49)	
⑨水遊び(夏季)	2.61(0.51)	2.61(0.51)	2.58(0.55)	2.66(0.49)	2.63(0.49)	
⑩ゲームや動画の視聴	2.76(0.5)	2.79(0.44)	2.79(0.46)	2.71(0.5)	2.64(0.55)	男>女*、低Ⅱ・中間Ⅰ>上位**
⑪つみ木やブロックやパズル	2.59(0.51)	2.59(0.53)	2.52(0.55)	2.6(0.51)	2.53(0.58)	
⑫人形遊びやままごと	2.59(0.56)	2.59(0.59)	2.46(0.64)	2.56(0.61)	2.57(0.58)	女>男***、低Ⅱ>中間Ⅰ*
⑬ミニカーなどおもちゃでの遊び	2.46(0.63)	2.48(0.62)	2.34(0.69)	2.39(0.66)	2.41(0.72)	男>女***
⑭折り紙や材料を使った製作遊び	2.58(0.56)	2.56(0.57)	2.61(0.53)	2.71(0.49)	2.62(0.53)	女>男***、中間Ⅱ>低Ⅱ**
⑮お絵かきやぬりえ	2.65(0.51)	2.66(0.52)	2.67(0.51)	2.75(0.45)	2.67(0.49)	女>男***
⑯絵本や図鑑を読む	2.42(0.57)	2.51(0.57)	2.52(0.56)	2.63(0.53)	2.58(0.57)	上位>低Ⅰ*、中間Ⅱ>低Ⅰ***、 中間Ⅱ>低Ⅱ*

札幌市・5歳(平均月齢72.3ヶ月)						
①お散歩(ぶらぶらと歩きまわるなど)	2.47(0.54)	2.33(0.57)	2.28(0.6)	2.37(0.61)	2.4(0.61)	
②公園の遊具で遊ぶ(すべり台など)	2.69(0.46)	2.6(0.49)	2.7(0.48)	2.7(0.46)	2.77(0.42)	
③砂場などでの砂や泥を使った遊び	2.31(0.66)	2.15(0.66)	2.26(0.65)	2.18(0.64)	2.2(0.63)	女>男*, 上位>低II**
④鬼ごっこやおひかけっこ	2.77(0.45)	2.63(0.53)	2.7(0.51)	2.68(0.5)	2.72(0.48)	男>女**
⑤なわとびやゴムとび	2.27(0.71)	2.08(0.74)	2.19(0.68)	2.34(0.68)	2.33(0.64)	女>男***, 上位・中間II>低II**
⑥虫や小さな生き物をとる	2.06(0.82)	1.96(0.77)	2.1(0.78)	2.19(0.75)	2.33(0.7)	男>女***, 上位>低II***, 中間II>低II**
⑦草花、木の枝や棒、石などの自然物で遊ぶ	2.52(0.61)	2.49(0.59)	2.48(0.62)	2.55(0.57)	2.6(0.54)	男>女*
⑧ソリ遊び(冬季)	2.67(0.53)	2.6(0.52)	2.59(0.52)	2.64(0.49)	2.66(0.48)	
⑨水遊び(夏季)	2.73(0.45)	2.68(0.48)	2.59(0.56)	2.63(0.49)	2.6(0.52)	
⑩ゲームや動画の視聴	2.69(0.52)	2.8(0.47)	2.72(0.49)	2.68(0.51)	2.55(0.64)	低II>上位***, 中間I・中間II>上位*
⑪つみ木やブロックやパズル	2.59(0.53)	2.57(0.56)	2.49(0.55)	2.54(0.56)	2.62(0.5)	男>女**
⑫人形遊びやままごと	2.61(0.58)	2.39(0.69)	2.45(0.64)	2.49(0.7)	2.49(0.64)	女>男***
⑬ミニカーなどおもちゃでの遊び	2.41(0.71)	2.37(0.66)	2.31(0.73)	2.27(0.72)	2.41(0.61)	男>女***
⑭折り紙や材料を使った製作遊び	2.62(0.56)	2.58(0.57)	2.68(0.48)	2.66(0.51)	2.7(0.48)	女>男***
⑮お絵かきやぬりえ	2.7(0.48)	2.6(0.55)	2.67(0.51)	2.68(0.51)	2.68(0.51)	女>男***
⑯絵本や図鑑を読む	2.55(0.61)	2.47(0.58)	2.55(0.54)	2.61(0.52)	2.65(0.52)	女>男*, 上位>低II*

注) 性別もしくは所得階層の主効果が有意であり、かつ多重比較(Sidakの調整による5%水準)において見られた有意な群間差については、表の右端に不等号を用いて詳細を記載のうえ、有意水準を示す記号(* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$)を右肩に付している。なお、性別と所得階層の交互作用はどの調査票においても有意ではなかった($p>.05$)。

ごと($p<.001$)、⑭折り紙や材料を使った製作遊び($p<.001$)、⑮お絵かきやぬりえ($p<.001$)、⑯絵本や図鑑を読む($p=.014$)遊びであった。所得階層についても同様に多重比較を実施した結果、⑯絵本や図鑑を読む遊びのみ「上位>低II」であった($p=.027$)。

北海道の「5歳」では、性別($F(16, 1359) = 43.0, p<.001, \eta_p^2 = .336$)、および所得階層の主効果が有意であった($F(64, 5333) = 1.61, p=.002, \eta_p^2 = .019$)。交互作用は有意ではなかった($F(64, 5333) = 1.192, p=.141, \eta_p^2 = .014$)。性別についてSidakの調整による多重比較を実施した結果、遊びの頻度が「男児>女児」となった遊びは、⑥虫や小さな生き物をとる($p<.001$)、⑦草花、木の枝や棒、石などの自然物で遊ぶ($p=.004$)、⑩ゲームや動画の視聴($p=.011$)、⑬ミニカーなどおもちゃでの遊び($p<.001$)であった。反対に「女児>男児」となった遊びは、⑤なわとびやゴムとび($p<.001$)、⑫人形遊びやままごと($p<.001$)、⑭折り紙や材料を使った製作遊び($p<.001$)、⑮お絵かきやぬりえ($p<.001$)であった。所得階層についても同様に多重比較を実施したところ、以下の結果が得られた。⑩ゲームや動画の視聴では「低II・中間I>上位」であった(低II>上位は $p=.006$; 中間I>上位は $p=.008$)。⑫人形遊

びやままごとでは「低II>中間I」であった($p=.021$)。⑭折り紙や材料を使った製作遊びでは「中間II>低II」であった($p=.003$)。⑯絵本や図鑑を読むでは「上位・中間II>低I」であったほか(上位>低Iは $p=.023$; 中間II>低Iは $p<.001$)、「中間II>低II」であった($p=.04$)。

最後に、札幌市の「5歳」では、性別($F(16, 881) = 34.33, p<.001, \eta_p^2 = .384$)、および所得階層の主効果が有意であった($F(64, 3451) = 2.067, p<.001, \eta_p^2 = .036$)。交互作用は有意ではなかった($F(64, 3451) = 1.273, p=.072, \eta_p^2 = .023$)。性別についてSidakの調整による多重比較を実施した結果、遊びの頻度が「男児>女児」となった遊びは、④鬼ごっこやおひかけっこ($p=.005$)、⑥虫や小さな生き物をとる($p<.001$)、⑦草花、木の枝や棒、石などの自然物で遊ぶ($p=.02$)、⑪つみ木やブロックやパズル($p=.001$)、⑬ミニカーなどおもちゃでの遊び($p<.001$)であった。反対に「女児>男児」となった遊びは、③砂場などでの砂や泥を使った遊び($p=.031$)、⑤なわとびやゴムとび($p<.001$)、⑫人形遊びやままごと($p<.001$)、⑭折り紙や材料を使った製作遊び($p<.001$)、⑮お絵かきやぬりえ($p<.001$)、⑯絵本や図鑑を読む($p=.029$)であった。所得階層についても同様に多重比較を実施したところ、以下の結果が得

られた。②公園の遊具で遊ぶ(すべり台など)では「上位>低Ⅱ」であった($p=.004$)、⑤なわとびやゴムとびでは「上位・中間Ⅱ>低Ⅱ」であった(上位>低Ⅱおよび中間Ⅱ>低Ⅱいずれも $p=.002$)。⑥虫や小さな生き物をとるでは「上位・中間Ⅱ>低Ⅱ」であった(上位>低Ⅱでは $p<.001$;中間Ⅱ>低Ⅱでは $p=.002$)。⑩ゲームや動画の視聴では「低Ⅱ・中間Ⅰ・中間Ⅱ>上位」であった(低Ⅱ>上位では $p<.001$;中間Ⅰ>上位では $p=.015$;中間Ⅱ>上位では $p=.03$)。⑯絵本や図鑑を読むでは「上位>低Ⅱ」であった($p=.021$)。

遊ぶ場所に関する分析

次に、札幌市の「2歳」と「5歳」、北海道の「2歳」と「5歳」それぞれの、遊ぶ場所に関する8つの質問項目について、所得階層5水準(低所得層Ⅰ、低所得層Ⅱ、中間所得層Ⅰ、中間所得層Ⅱ、上位所得層)×よく遊ぶ場所(あてはまる、選択なし)による χ^2 検定を実施した。結果は以下のとおりである(Table 2)。なお、北海道の「2歳」における①自宅、②友だちの家、⑧児童会館・公民館などの公共施設、北海道の「5歳」における⑦子育て広場(サロン)や子育てセンター、札幌市の「5歳」における⑦子育て広場(サロン)や子育てセンターと⑧児童会館・公民館などの公共施設の項目については、期待度数5未満のセルが全体の20%を超えていたため統計的検定からは除外した。また、各項目の検定における効果量(CramerのV)については、Table 2を参照されたい。

北海道の「2歳」では、遊ぶ場所8項目いずれについても、所得階層間で回答に有意な偏りはみられなかった(いずれも $p>.05$)。

札幌市の「2歳」では、以下の4項目で回答に有意な偏りがみられた。第1に、②友だちの家である($\chi^2(4)=17.4, p=.002$)。残差分析の結果、低所得層Ⅱにおいて有意に遊ぶことが多く、上位所得層において有意に遊ぶことが少なかった。第2に、③近所の路地や道路である($\chi^2(4)=14.63,$

$p=.006$)。残差分析の結果、低所得層Ⅱにおいて有意に遊ぶことが多く、上位所得層において有意に遊ぶことが少なかった。第3に、⑤幼稚園や保育園などである($\chi^2(4)=15.63, p=.004$)。残差分析の結果、上位所得層において有意に遊ぶことが多く、中間所得層Ⅰにおいて有意に遊ぶことが少なかった。第4に、⑦子育てひろば(サロン)や子育て支援センターである($\chi^2(4)=10.9, p=.028$)。残差分析の結果、中間所得層Ⅰにおいて有意に遊ぶことが多く、上位所得層において有意に遊ぶことが少なかった。その他の項目については、いずれも有意な回答の偏りは見られなかった($p>.05$)。

北海道の「5歳」では、⑥ショッピングセンターや商店街のみ回答に有意な偏りがみられた($\chi^2(4)=17.43, p=.002$)。残差分析の結果、低所得層Ⅰにおいて有意に遊ぶことが多く、低所得層Ⅱにおいて有意に遊ぶことが少なかった。その他の項目については、いずれも有意な回答の偏りは見られなかった($p>.05$)。

札幌市の「5歳」では、①自宅のみ回答に有意な偏りがみられた($\chi^2(4)=10.01, p=.004$)。残差分析の結果、中間所得層Ⅱにおいて有意に遊ぶことが多く、低所得層Ⅰにおいて有意に遊ぶことが少なかった。その他の項目については、いずれも有意な回答の偏りは見られなかった($p>.05$)。

休日に遊ぶ相手に関する分析

最後に、札幌市の「2歳」および「5歳」、北海道の「2歳」および「5歳」についてそれぞれ、所得階層5水準(低所得層Ⅰ、低所得層Ⅱ、中間所得層Ⅰ、中間所得層Ⅱ、上位所得層)を独立変数、休日に遊ぶ相手に関する質問3項目の得点を従属変数とした、一要因多変量分散分析(MANOVA)を行った。なお、その際には先述した回答者数の関係から、分析には「両親世帯」による回答のみを使用した。記述統計をTable 3に示す。結果、いずれの地域・年齢においても、所得階層による有意な主効果は見られなかった($p>.05$)。

Table 2 地域・乳幼児の年齢毎における所得階層別の質問項目「遊ぶ場所」に対して「あてはまる」と回答した人数(上段)と割合(下段)、および統計量(χ^2 値とCramerのV)

	北海道・2歳(平均月齢21.1ヶ月)						札幌市・2歳(平均月齢31.5ヶ月)					
	所得階層					χ^2 値 (CramerのV)	所得階層					χ^2 値 (CramerのV)
	低I	低II	中I	中II	上位		低I	低II	中I	中II	上位	
①自宅	79 97.5	130 97.7	152 96.8	191 97.4	61 96.8	—	130 93.5	234 97.1	250 94.7	384 98	273 96.1	8.36 (0.08)
②友だちの家	3 3.7	5 3.8	5 3.2	9 4.6	1 1.6	—	7 5.0	21 8.7 ↑	12 4.5	18 4.6	3 1.1 ↓	17.4** (0.12)
③近所の路地や道路	11 13.6	14 10.5	28 17.8	34 17.3	9 14.3	4.0 (0.08)	10 7.2	27 11.2 ↑	22 8.3	23 5.9	9 3.2 ↓	14.63** (0.11)
④近所の空き地や公園	49 60.5	84 63.2	98 62.4	128 65.3	43 68.3	1.27 (0.05)	109 78.4	181 75.1	201 76.1	310 79.1	220 77.5	1.68 (0.04)
⑤幼稚園や保育園など	52 64.2	75 56.4	78 49.7	118 60.2	33 52.4	6.45 (0.1)	89 64.0	139 57.7	147 55.7 ↓	261 66.6	196 69.0 ↑	15.63** (0.11)
⑥ショッピングセンターや商店街	6 7.4	14 10.5	14 8.9	12 6.1	5 7.9	2.28 (0.06)	20 14.4	24 10.0	36 13.6	40 10.2	34 12.0	3.52 (0.05)
⑦子育て広場(サロン)や子育てセンター	9 11.1	17 12.8	33 21	37 18.9	14 22.2	6.93 (0.11)	4 2.9	15 6.2	22 8.3 ↑	27 6.9	8 2.8 ↓	10.9* (0.09)
⑧児童会館・公民館などの公共施設	3 3.7	7 5.3	13 8.3	6 3.1	5 7.9	—	3 2.2	6 2.5	9 3.4	10 2.6	3 1.1	3.48 (0.05)

	北海道・5歳(平均月齢67.9ヶ月)						札幌市・5歳(平均月齢均72.3ヶ月)					
	所得階層					χ^2 値 (CramerのV)	所得階層					χ^2 値 (CramerのV)
	低I	低II	中I	中II	上位		低I	低II	中I	中II	上位	
①自宅	234 94.40	357 96.70	299 95.50	401 97.60	216 96.00	5.16 (0.06)	109 94 ↓	169 98.3	171 95.5	322 98.8 ↑	221 96.1	10.01* (0.1)
②友だちの家	19 7.7	39 10.6	26 8.3	40 9.7	18 8.0	2.36 (0.04)	7 6.0	11 6.4	20 11.2	25 7.7	19 8.3	3.72 (0.06)
③近所の路地や道路	22 8.9	50 13.6	38 12.1	62 15.1	27 12.0	5.81 (0.06)	13 11.2	16 9.3	16 8.9	35 10.7	19 8.3	1.4 (0.04)
④近所の空き地や公園	156 62.9	245 66.4	215 68.7	288 70.1	145 64.4	4.77 (0.06)	76 65.5	133 77.3	133 74.3	247 75.8	184 80.0	9.24 (0.1)
⑤幼稚園や保育園など	182 73.4	284 77.0	236 75.4	318 77.4	185 82.2	5.77 (0.06)	80 69.0	141 82.0	134 74.9	238 73.0	178 77.4	8.12 (0.09)
⑥ショッピングセンターや商店街	31 12.5 ↑	16 4.3 ↓	28 8.9	24 5.8	15 6.7	17.43** (0.11)	11 9.5	17 9.9	13 7.3	20 6.1	15 6.5	3.3 (0.06)
⑦子育て広場(サロン)や子育てセンター	6 2.4	8 2.2	7 2.2	7 1.7	3 1.3	—	1 0.9	0 0	2 1.1	2 0.6	1 0.4	—
⑧児童会館・公民館などの公共施設	8 3.2	5 1.4	11 3.5	11 2.7	7 3.1	3.76 (0.05)	2 1.7	0 0	2 1.1	1 0.3	2 0.9	—

注) 各質問項目・所得階層における上段は「あてはまる」回答のn、下段は「選択なし」を含めた全回答における「あてはまる」回答の割合(%)。地域・年齢別に質問項目毎に χ^2 検定を実施し、有意であった項目には有意水準を示す記号(* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$)を χ^2 値の右肩に付しているほか、「あてはまる」の回答が有意に多かった群には“%”の右横に“↑”を、同じく少なかった群には“↓”を記載し、それぞれの%と矢印に下線を引いている。 χ^2 値とCramerのVが“-”の項目については、期待度数5未満のセルが全体の20%を超えていたため統計的検定からは除外した。

Table 3 地域・乳幼児の年齢毎における所得階層別の「休日に遊ぶ相手」に関する回答の記述統計

	所得階層				
	低所得層 I	低所得層 II	中間所得層 I	中間所得層 II	上位所得層
	M (SD)				
北海道・2歳					
①お母さん	2.88(0.33)	2.88(0.33)	2.86(0.35)	2.84(0.39)	2.91(0.29)
②お父さん	2.73(0.49)	2.63(0.55)	2.63(0.5)	2.74(0.46)	2.76(0.43)
③その他家族	2.59(0.54)	2.48(0.5)	2.46(0.58)	2.46(0.57)	2.29(0.58)
札幌市・2歳					
①お母さん	2.72(0.45)	2.79(0.43)	2.72(0.47)	2.75(0.45)	2.81(0.41)
②お父さん	2.5(0.53)	2.57(0.56)	2.63(0.53)	2.65(0.53)	2.66(0.51)
③その他家族	2.51(0.56)	2.47(0.55)	2.45(0.53)	2.42(0.61)	2.4(0.59)
北海道・5歳					
①お母さん	2.58(0.5)	2.63(0.51)	2.58(0.51)	2.63(0.5)	2.61(0.5)
②お父さん	2.31(0.61)	2.45(0.59)	2.5(0.56)	2.54(0.55)	2.54(0.54)
③その他家族	2.48(0.53)	2.47(0.54)	2.49(0.57)	2.47(0.56)	2.45(0.55)
札幌市・5歳					
①お母さん	2.48(0.51)	2.57(0.5)	2.52(0.56)	2.49(0.54)	2.58(0.54)
②お父さん	2.25(0.65)	2.42(0.58)	2.43(0.54)	2.46(0.54)	2.53(0.53)
③その他家族	2.46(0.61)	2.39(0.58)	2.45(0.5)	2.49(0.53)	2.45(0.57)

考 察

本研究の目的は、家族間における経済的な格差が、乳幼児期の子どもたちが経験する普段の遊びにいかに関与しているかを明らかにすることであった。この目的を達成するために、第2回調査における2歳票および5歳票について、子どもの遊びの種類・場所・相手に注目して分析を実施した。得られた結果、およびCOVID-19感染拡大以前の2016年～2017年にほぼ同じ項目・地域・調査協力者の属性で実施された第1回調査の結果（川田、2022）との比較から得られる示唆は、以下の通りである。なお、研究目的との関係から、遊びの種類をめぐる性別の主効果に関する分析結果の考察については省略する。

遊びの種類と家族の貧困との関連

所得階層と子どもの遊びの種類との関係については、まず、札幌市の「2歳」では、⑯絵本や図鑑を読む遊びにおいて「上位>低II」であった。

北海道の「2歳」では所得階層間で有意な差が見られなかった。一方、「5歳」では「2歳」を上回る項目数で、所得階層の有意な主効果が見られた。まず、北海道の「5歳」では4項目で、所得階層間の有意な差がみられた。具体的には、⑩ゲームや動画の視聴では「低II・中間I>上位」、⑫人形遊びやままごとでは「低II>中間I」、⑭折り紙や材料を使った製作遊びでは「中間II>低II」、そして⑯絵本や図鑑を読むでは「上位・中間II>低I」であった。札幌市の「5歳」では5項目で、所得階層間の有意な差がみられた。具体的には、②公園の遊具で遊ぶ（すべり台など）では「上位>低II」、⑤なわとびやゴムとびでは「上位・中間II>低II」、⑥虫や小さな生き物をとるでは「上位・中間II>低II」、⑩ゲームや動画の視聴では「低II・中間I・中間II>上位」、⑯絵本や図鑑を読むでは「上位>低II」であった。

以上の結果は、2016年～2017年の第1回調査（川田、2022）とは異なるものとなった。その最たる特徴は、以下の3点に集約される。

第1に、所得階層間における、子どもが経験する遊びのレパートリーの偏りの拡大である。2016年～2017年の第1回調査を分析した川田(2022)において、所得階層間で遊びの種類に格差が見られた項目は、札幌市の「2歳」のみ2項目で(当時の項目⑩つみ木やブロックやパズルで所得階層の主効果、⑬ミニカーなどおもちゃでの遊びで性別と所得階層の交互作用が有意)、残りの北海道「2歳」と「5歳」および札幌市の「2歳」では1項目のみ(北海道の「2歳」では③砂場などでの砂や泥を使った遊び、残りの調査票では当時の項目⑩テレビゲームや携帯ゲームで所得の主効果が有意)であり、家族の貧困の影響が色濃く現れる遊びの種類は限定的であった。一方、2021年～2022年に実施された第2回調査の「5歳」において、所得階層間で有意な差異が見られた遊びの種類は、北海道で4項目、札幌市で5項目に昇った。わずか5年程度の期間で、家族の経済的格差にかかる暮らしの困難が、乳幼児の子どもが日々経験している遊びのレパートリーの偏りとして、強固に現れつつあることを示唆するものである。

第2に、乳幼児期の子どもの加齢にともなう経済的格差の表出である。上述のとおり、「2歳」に比べて「5歳」の方が、北海道・札幌市を問わず、所得階層の効果が有意に見られる遊びの種類が増加する結果となった。乳幼児期における加齢は、子どもの心身の飛躍的な発達、ひいては子どもたちの日常生活における自由度の高まりを意味する。すなわち、家族間の経済的格差はすでに乳幼児期の頃から、子どもの発達にともなう自由度の高まりをはばむように日々の経験の偏りとして表れ、そして蓄積しはじめていることが推察される。

第3に、「低所得層Ⅱ」の所得階層に位置する家族の子どもが日々経験している遊びのレパートリーが、その他の所得階層の家族の子どもと比べて有意に偏っていたことである。特に「5歳」ではそれが顕著であり、遊びの種類に関する複数の項目で、低所得層Ⅱとその他の所得階層との間に有意な差がみられた。低所得層Ⅰもさることなが

ら、低所得層Ⅱの家族の子どもが経験する遊びの多くに有意な偏りがみられた第2回調査の結果は、当該所得階層の家族における子育てや暮らしの苦しさを彷彿とさせるものであり、具体的な対応の検討やさらなる調査の継続が求められる。

遊ぶ場所と家族の貧困との関連

遊ぶ場所と貧困との関連については、特に札幌市の「2歳」で現れる結果となった。まず、北海道の「2歳」では所得階層別で遊ぶ場所に有意な偏りは見られなかった。次に、北海道の「5歳」では⑥ショッピングセンターや商店街のみ、低所得層Ⅰにおいて有意に遊ぶことが多く、低所得層Ⅱにおいて有意に遊ぶことが少なかった。また、札幌市の「5歳」では①自宅のみ、中間所得層Ⅱにおいて有意に遊ぶことが多く、低所得層Ⅰにおいて有意に遊ぶことが少なかった。いずれも有意な偏りは、1つの場所か、もしくは見られない結果となった。

一方、札幌市の「2歳」については、以下の4つの場所で、所得階層毎に有意な偏りがみられた。第1に、②友だちの家では、低所得層Ⅱにおいて有意に遊ぶことが多く、反対に上位所得層において有意に遊ぶことが少なかった。第2に、③近所の路地や道路では、低所得層Ⅱにおいて有意に遊ぶことが多く、反対に上位所得層において有意に遊ぶことが少なかった。第3に、⑤幼稚園や保育園などでは、上位所得層において有意に遊ぶことが多く、中間所得層Ⅰにおいて有意に遊ぶことが少なかった。第4に、⑦子育てひろば(サロン)や子育て支援センターでは、中間所得層Ⅰにおいて有意に遊ぶことが多く、上位所得層において有意に遊ぶことが少なかった。

第1回調査の結果を考察した川田(2022)が指摘した、2歳(1歳半ないし2歳半頃)の段階で、世帯所得によって子どもの遊び場がゆるやかに区分されている傾向が、第2回調査においても同様に示唆された。そして、第2回調査の結果を受けてさらに特筆すべきは、特に北海道内の都市部である札幌市の「2歳」において、この所得階層に

よる遊び場の区分が現れたことである。回答のばらつきこそ決して大きくなくゆるやかであるものの、所得階層による子育てや遊び場の分断は、地方よりも都市部において、より色濃く現れていることが推察される。

遊ぶ相手と家族の貧困との関連

最後に、乳幼児が休日に遊ぶ相手である。第2回調査では両親世帯のみを分析した結果、北海道と札幌市の「2歳」と「5歳」いずれにおいても、母親・父親・その他家族と遊ぶ頻度に、所得階層間の有意な差は見られなかった。以上の結果は、第1回調査とは異なるものとなった。第1回調査では、両親世帯の札幌市の「2歳」および北海道の「5歳」における父親と子どもが遊ぶ頻度について、所得階層間に有意な差がみられた(川田、2022)。第1回調査と第2回調査との結果の相違は、第2回調査が国内にCOVID-19の感染が広がっている最中に行われたことに由来している可能性がある。感染症が広がっている最中、父親が家族から離れている時間が短くなり、それが今回の結果として現れていることも十分に考えられる。この傾向が一時的なものか、それとも継続的なものなのかについては、継続調査等を通しての検討が期待される。

課題と展望

最後に、今後の課題と展望を3点述べる。第1に、調査を進める地域の拡大である。本調査は北海道内の子育て家族に協力を依頼したものである。そのため、今回得られた結果や考察が北海道のみで特有に現れている傾向なのか、それとも日本国内である程度共通してみられるものなのかについては、引き続き調査対象となる地域を拡大しながら確認を進めていく必要がある。

第2に、調査時期の特徴である。第2回調査は、日本国内にCOVID-19の感染が拡大し、行動に制限があった時期に実施された調査である。そうした、以前とは異なる人々の生活様式のあり方が、第2回調査の結果に影響を与えている可能性は十

分に考えられる(たとえば、休日に父親と遊ぶ頻度など)。その一方で、川田(2022)との比較でいえば、殊に遊びの種類において、所得階層間の格差が鮮明に現れる結果となった。この縦断的な傾向が、COVID-19によってもたらされたものか、それとも感染症の有無を問わず継続して現れ、そして拡大しているものかを正確に判断するためには、追加でもう1時点以上での調査が必要となるだろう。しかしながら、現時点においてこの所得階層間の差異は有意に見られているものであり、特に遊びの種類における低所得層Ⅱの厳しさは顕著である。継続調査を進めていくことと同時に、子育てや暮らしの苦しさを彷彿とさせる階層の家族へのアプローチを具体化していくことが期待される。

第3に、分析に使用する項目についてである。本研究では目的との関係から、主に所得階層5類型に説明変数を絞って、遊びの種類・場所・相手と貧困との関係について分析を進めてきた。しかしながら、川田(2022)のように、他にも分析・考察が可能な属性はあるだろう。理論的基盤を用意した上で、今後も継続調査や分析を進めることで、乳幼児期の遊びをめぐる所得階層間の差異を明るみにし、子育て世帯に対する具体的な対応へとつなげていくことが期待される。

文 献

- Bassok, J., Finch, J. E., Lee, R., Reardon, S. F., Waldfogel, J. (2016). Socioeconomic gaps in early childhood experiences: 1998 to 2010. *AERA Open*, 2(3), 1-22. <https://doi.org/10.1177/2332858416653924>
- 川田学(2019). 子どもの世界の中心としての「遊び」小西祐馬・川田学(編) 松本伊智朗(編集代表) 遊び・育ち・貧困—子どもの世界を守る(シリーズ 子どもの貧困2) 明石書店
- 川田学(2022). 乳幼児期の生活, 子育て, 保育 松本伊智朗(編) 子どもと家族の貧困—学際的調査からみえてきたこと(pp.127-149) 法律文化社
- 加用文男(2013). 余暇論の呪縛—ジャック・アンリオからみたホイジングとカイヨワ 心理科学, 34(1), 68-83. https://doi.org/10.20789/jraps.34.1_68

- 小西祐馬 (2016). 乳幼児期の貧困と保育—保育所の可能性を考える 秋田喜代美・小西祐馬・菅原ますみ (編) 貧困と保育—社会と福祉につなぎ、希望をつむぐ (pp.25-52) かもがわ出版
- 厚生労働省 (2021). 令和3年版 労働経済の分析—新型コロナウイルス感染症が雇用・労働に及ぼした影響 <https://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/roudou/20/dl/20-1.pdf>
- 厚生労働省 (2022). 令和4年版 労働経済の分析—労働者の主体的なキャリア形成への支援を通じた労働移動の促進に向けた課題 <https://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/roudou/21/dl/21-1.pdf>
- 松本博雄・常田美穂・川田学・赤木和重 (2015). 0123 発達と保育—年齢から読み解く子どもの世界 ミネルヴァ書房
- 松本伊智朗 (2022). 貧困を可視化する—大規模な生活調査の視点と背景 松本伊智朗 (編) 子どもと家族の貧困—学際的調査からみえてきたこと (pp.3-28) 法律文化社
- 野家啓一 (2008). 科学のナラトロジー—「物語りの因果性」をめぐって 飯田隆・伊藤邦武・井上達夫・川本隆史・熊野純彦・篠原資明・清水哲郎・末木文美士・中岡成文・中畑正志・野家啓一・村田純一 (編) 岩波講座哲学01—いま〈哲学する〉ことへ (pp.51-72) 岩波書店
- 心理科学研究会 (編) (2019). 新・育ちあう乳幼児心理学—保育実践とともに未来へ 有斐閣
- Waldfoegel, J., Kwon, S. J., Wang, Y., Washbrook, L., Casoni, V. P., Olczyk, M., Schneider, T., Panico, L., Solaz, A., Weinert, S., Volodina, A., de la Rie, S., Keizer, R., Nozaki, K., Yamashita, J., Kameyama, Y., & Akabayashi, H. (2023). Inequalities in resources for preschool-age children by parental education: Evidence from six advanced industrialized countries. *European Journal of Population*, 39(37), 1-31. <https://doi.org/10.1007/s10680-023-09685-0>

付 記

本論文は JSPS 科研費 JP 21H04404 の助成を受けている。